

タカノ（7885）企業分析レポート

作成日：2026年02月25日

【直近5年の業績推移】

決算期	売上高（百万円）	営業益（百万円）	経常益（百万円）	EPS（円）	配当金（円）	寸評
2022.03	22,748	1,143	1,237	58.8	—	業績回復
2023.03	23,037	999	1,103	54.5	—	減益調整
2024.03	25,173	880	1,023	39.5	—	増収減益
2025.03	23,969	451	528	34.2	—	利益縮小
2026.03予	25,000	750	850	39.4	—	回復予想

【財務・キャッシュフロー概要】

決算期	営業CF（百万円）	投資CF（百万円）	財務CF（百万円）	現金残高（百万円）	自己資本比率（%）
2023.03	733	-400	-223	7,641	77.8
2024.03	1,685	-514	-405	8,469	79.5
2025.03	836	-334	-425	8,596	82.9

【財務コメント】

営業CFは安定的に黒字を維持しており、投資CFは設備投資水準で推移。財務CFは配当および借入返済が中心とみられる。現金残高は増加傾向で、自己資本比率は80%前後と高水準を維持しており、財務安全性は高い。

【会社概要】

タカノは長野県本社の製造業で、オフィスチェアを中心とする生活関連製品と、半導体・電子部品向けの精密検査装置や計測機器を展開する。近年は半導体後工程向け検査技術の高度化に注力し、干渉光学技術など高精度測定分野を成長ドライバーとして位置付けている。

【歴史】

創業以来、家具・事務機器メーカーとして事業を拡大。その後、精密機器分野へ進出し、電子部品・半導体関連装置の開発を強化してきた。2000年代には業績拡大期を迎えたが、リーマンショックや需要変動の影響を受け業績は変動。近年は再び半導体関連事業への集中により収益基盤の再構築を図っている。

【立ち位置】

半導体製造装置市場では大手装置メーカーに比べ規模は小さいが、特定工程向けの検査・計測技術に強みを持つニッチプレイヤーである。低PBR水準と高自己資本比率を背景に財務余力は十分。一方で業績は市況影響を受けやすく、半導体設備投資動向に左右される構造にある。

【見解】

中長期的には、半導体後工程（検査・計測）の高度化やAI関連投資の継続を背景に、同社の半導体関連売上への伸長が確認できれば、収益性改善とバリュエーション見直し（低PBR修正）が進む余地がある。一方で、足元は利益の振れが大きく、四半期で赤転/黒転が混在しており、テーマ物色による株価変動が先行しやすい。受注残や採用工程の具体化、利益率の安定を伴うかが評価の分水嶺となる。

【株価・市場情報】（2026年02月24日時点）

株価（終値・円）	PER（倍）	PBR（倍）	配当利回り（％）	信用倍率（倍）	時価総額（億円）
996	25.2	0.47	2.01	93.20	156

【同業他社比較】

銘柄名	株価（円）	PER（倍）	PBR（倍）	時価総額	特徴
タカノ（7885）	996	25.2	0.47	156億円	低PBR・高自己資本比率。半導体検査/計測の期待がテーマ物色と合流。
前田工織（7821）	2,102	18.58	1.91	1,431億円	土木・産業資材大手。地盤補強材などインフラ向けが主軸。
テクセンド（429A）	2,943	15.48	1.77	2,922億円	半導体用フォトマスクの開発・製造。TOPPAN系。
リンテック（7966）	5,340	19.43	1.44	3,870億円	粘接着素材・機能性フィルム。光学/電子材の比重が高い。
ソノコム（7902）	1,112	16.86	0.44	55億円	電子部品向けスクリーン印刷用版・フォトマスク専業。
アルメディア（7859）	211	—	0.57	43億円	耐火・断熱材が主軸。カーボンナノ分野にも注力。

【投資成功シナリオ】

半導体関連の設備投資が想定以上に継続し、同社の検査・計測分野で「量産採用」が進む。売上が積み上がるだけでなく、利益率が安定して改善し、四半期のブレが小さくなることで市場の評価軸が「テーマ」から「実力」へ移行。結果として、低PBR修正が進み、株価はBPSやROE改善を根拠に段階的な見直し局面へ。材料先行の値動きから、業績裏付けの上昇トレンドへ移る。

【投資失敗シナリオ】

テーマ物色のピークアウト後、受注や採用工程の具体化が進まず、売上の伸びが想定未達となる。固定費負担や季節性の影響で四半期利益が再び不安定化し、黒転しても持続性が疑われる。結果として「低PBR＝割安」ではなく「低PBR＝収益の不確実性」と見なされ、評価は戻り売り優勢に。信用倍率の高さも重なって需給が悪化すると、急騰分の調整が大きくなり、長期の停滞局面に入りやすい。

【メモ】

ストップ高は「半導体関連×低PBR」の連想が強い可能性。次に見る論点は受注残の増減、半導体事業の売上/利益率の持続性、四半期のブレ縮小。需給面では信用倍率にも注意。